



10月号

平成30年9月28日

横浜市立東中田小学校

校長 天野 直美

TEL.802-0500 FAX.801-4089

WEBページ <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/higashinakada/>

家庭の役割 学校の役割

校長 天野 直美

6月。5歳の子どもが両親の虐待により亡くなったという、信じがたい悲しいニュースが飛び込んできました。世の中のたくさんの人々が憤りを感じながらこのニュースを受け止めたと思います。ニュースでは、その子どもが朝4時に起きて文字の練習を両親から強要されていたという衝撃の事実も報道されていました。私はこれまで学校に務めて、小学校に入学するお子さんには入学前までに自分の名前だけはひらがなで読めて書けるようにとお願いしてきました。本格的に文字を学ぶのは小学校に入学してからのことと認識していました。今の社会的な認識は違うのでしょうか？どう考えても、親が子どもの命を奪ってまで、指導することはあり得ないことです。

家庭には家庭でしかできない役割があると思います。私の思いですが、子どもにとって家庭はいちばん正直に自分の良さも弱点も出せる場所であってほしいのです。そして子どもの良さも弱点も受け止め、自立していく子どもの将来を思い、いちばんの支援者に親になってほしいのです。

歴史学者磯田道史いそだみちふみさんの著書「江戸の備忘録」びぼうろくに掲載されている「武者小路実篤の父のことば」むしゃのこうじさねあつというエッセイに私は著者と思いを同じにしました。

〈武者小路実篤の父のことば〉

武者小路実篤は、大正・昭和の小説家である。お公家の子孫だから、子供の頃は学習院に通った。成績は悪かった。当時の学習院の卒業式は残酷であった。成績の悪い者から順番に式場に入るきまりになっていた。そういうわけで、先頭を歩かされる劣等生はたまらない。世間体が悪いから、たいてい仮病をつかって休んだ。実篤の成績はビリから四番目で成績の悪い子が卒業式を休むからあやうく先頭を歩かされそうになったという。(武者小路辰子『ほくろの呼鈴-父 実篤回想』)ただ実篤には卑屈なところがみじんもなかった。それには秘密があった。

実篤は二歳で父を亡くしている。病気であった。実篤の兄は生まれつきの優等生。病気の父の枕元を静かに歩いた。だが実篤は暴れん坊。ドタバタ歩いた。母が静かに歩くよう注意すると、父は言った。「元気に歩いているのを喜んでいたので。しかるな。」実篤は、この父の言葉を母から聞かされて育った。時々思い出しては、父の愛を感じたという。

また父は死ぬ直前、実篤を抱き「この子はよく教育してくれる人があったら、世界にひとりという人間になるだろう。」と言った。この言葉ほど、実篤を勇気づけたものはなかった。成績で人は測れない。自分は世界でたった一人の人間になろう。実篤は一生涯、父の言葉を胸に刻んで生きてきた。そして小説家・武者小路実篤が誕生した。人間への目線が温かい彼の作品。私は好きである。

〈出典〉 江戸の備忘録 磯田道史 文春文庫

武者小路実篤の父のことばにある「よく教育してくれる人」の役割を果たせるよう、東中田の一人ひとりへの目線を大事にしていきたいと思えます。保護者の皆様。共に育ててまいりましょう。